

はじめに

—「比較研究とは何か」を問うこと

今橋 映子

本ブックレットは、筆者がフェローを務める東京大学ヒューマニティーズセンター [=以下、HMCと略す] の助成研究「比較文学比較文化研究の理論と教育の相互作用に関する総合的研究」(2021年10月-2022年9月) の研究成果に関し、2つのセミナーの記録を再構成してお届けするものである。最初のセミナーは個人発表の記録、2回目のセミナーは共同発表の記録となっている。

HMCの理念を共有して一般の方々にも理解できるように心を砕いたが、もとよりこのブックレット自体の目的は、この2つのセミナーを通して「比較研究とは何か」を問い直すことにあり、研究代表者として考えている。そしてそれは、人文系学問に共通する問題をもまた巡っているという点において、他分野の人文研究者にも益するところがあればと願うものである。

さらに今回の研究は、「比較研究」の意味の問い直しだけでなく、そうした学際研究が「教育の場」(大学、大学院教育) でいかに展開されているのかについて、(おそらく世界でも初めて) 量的調査および質的調査を用いて実証的に明かしたという点でも重要であろう。人文研究が社会において「不要不急」を言われて久しいが、人文研究の一つの大きな意義は、教養教育に直結する大事な基盤である、という点ではないだろうか。とりわけ「比較研究」を専攻する私たちは、それを強く意識すべき時代が来ていると感じる。このブックレットでは、それをなるべく具体的事例から探っていこうと思う。

ディシプリンとしての比較文学

筆者は「比較文学・比較文化」を専門としている。気づけば30年以上の研究歴があるが、ひとたび専門学会の「外」に出れば、この「比較」という言葉がいつも曲者となる。「比較って、何と何を比較されているのですか?」という問いに悩まされて苦笑する「同業者」は多いであろう。

ちなみに「比較文学・比較文化」といっても、ディシプリンにあたるのは「比較文学」であり、私たちはその理論が応用された学際研究として「比較文化」を考えている。ディシプリンとは辞書的には「訓練、規律」を指すが、学問用語と

してはすなわち、固有の理論や原理をもつ学問分野、そのための技能が訓練された上で向き合う学問分野のことであり、転じて大学の組織（＝学科）を指す場合もある。

そもそも「比較文学」とは、フランス語の学問名＝la littérature comparéeの日本語訳——そこから分かるように、比較文学は19世紀フランスで生まれた学問である。1830年頃フランスで提唱され、大学組織としては1896年にリヨン大学文学部の講座が最初で、現在まで世界各地で研究される学問分野となる。英語ではcomparative literatureと言い、「比較文学、比較芸術、比較文化」などを総称してcomparative studiesと称することが多い。以下、comparative studiesの意味で「比較研究」と称することとした。

比較文学は最初フランスにおいては、「各国文学」の補助学的性格をもって誕生した。19世紀ヨーロッパは「国民国家主義」が台頭し、一民族＝一国家を政治的理想としたが、次第に、国家の精神的アイデンティティを保証するものとして「各国文学史」が構築されていく。比較文学は、ある作家が外国文学にどのような「影響」を及ぼしたかという点においては、各国文学を補強する役割を担ったが、ある作家が外国文学からどのような影響を受け、どのような「受容」をしたかを研究するという側面においては、文学＝民族＝言語という固定概念を打ち破る可能性を示していた。しかしこの「影響・受容」に重きをおく「フランス派比較文学」の限界はすぐにも示されることとなる。戦後、比較文学の学問的中心はフランスからアメリカへと移行し、アメリカでは「比較文学＝文学理論」という認識のもとに、文学理論からさらに文化理論へと向かう傾向を見せる。最近では「世界文学」研究の隆盛もあいまって、比較文学の「比較」の意味はさらに曖昧になったともいえる。

日本においては戦後、1948年に日本比較文学会が創立され、1953年に東京大学大学院に比較文学比較文化研究室、日本で最初の専門研究室が設置された。日本の比較研究はどちらかというと、アメリカ派の文学理論寄りというより、フランス派の「影響受容研究」から出発して、作品解釈を中心に置きながら、近代化の諸問題、比較詩学、比較芸術、翻訳研究、異文化理解、東アジア比較文学など、独自に新しい観点が取り入れられてきた。2023年という時点で改めて定義してみれば、この日本で展開している「比較文学」とは、作品や作家を一定の国籍や文化に固定された存在と見なさず、絶えず間テクスト性の中に捉えて、作品創造の過程と由来をダイナミックに捉えることを旨とする学問（ディシプリン）であるといえる。そのために必要とされる訓練は、作品解釈の技法（explication de texte）と高い外国語力だろう。従って、日本における比較文学の教育機関が、最

初は学部でなく大学院から始まったことも了解できる。

比較文学の教育現場で私たちがよく使う表現は、「比較文学の方法は、クロスエリア（文化の越境）とクロスジャンル（ジャンルの越境）です。これを縦軸、横軸にして考えてみましょう」ということ。つまり「AとBの比較」ではなく、Aそのものに包含され、内部で溶解して変容していくB（やCや…）の要素、それをAという世界の再認識のために、繊細に捉えることこそが、命なのである。それによって作品や作家が固定され、固有の世界に閉鎖されたものでないことがよく伝わる。しかも、文学のみならず、間テキスト性の触手は、別の表現ジャンル（絵画、音楽、映画、漫画…）にも伸びていく。こうしてある作品が、固有に閉じている世界ではなく様々な外の体系と関係を取り結びながら、しかも独自に提示する世界を描いてみせること。あるいは文化やジャンルを越境して生き、創作する人間を描いてみせることが、比較文学の真骨頂であるともいえよう。

比較文学から比較文化へ

ディシプリンとしての比較文学は、分析対象が基本「文字テキスト」であるが、比較芸術はその対象が、「視覚テキスト」や「音楽テキスト」など芸術諸ジャンルになる。さらに比較文化もまた、ディシプリンとしての比較文学から派生した学際研究であると私たちは考えている。

今回の「全国大学・大学院シラバス調査」(本ブックレット「その2」を参照のこと)の結果によれば、「比較文化」を掲げる授業の中には、文化人類学関連の研究者が担当するものも若干見られ、実際比較文学と文化人類学の知見は、「比較文化」において交錯するところもあると考えられる（これは今後精緻に解くべき理論的課題でもある）。

比較文学由来の比較文化は、原理的に、「AとBの比較でない」ことを、ここまでお読み下さった読者は予感されると思う。例えば悪いが、「味噌汁とスープの比較文化論」「肉食文化と菜食文化の比較」など、あまりに皮相な文化論は巷に溢れているし、またそれが比較文化という用語の「胡散臭さ」を想起させるのも事実である。一般的な事典で比較文化とは、「古今東西のあらゆる文化圏を背景として、文化形態を比較考量し、人間文化の相互理解を目指す一連の試図」(ブリタニカ国際大百科事典)と説明されている。

しかし比較文学に由来する比較文化論は今日、「異文化理解とは何か」を根幹に掲げる学際研究である」と言い換えるのが最も適切であろう。もちろん、日本と西洋、キリスト文化圏とイスラム文化圏など、文化同士の交流、交渉、葛藤、融和などの「古典的」テーマを排除するものではない。しかし、先ほど述べたよ

うに、150年以上にわたる学問の進展の中で、比較文学においては、ある人間や作品、文化事象を、閉じられた固有の体系とは見なさない。それは、さまざまな他の事象との関係性の中にある。あるいはそれ自身が様々な越境を繰り返していく存在であるかもしれない——と考える。日本文化と一口に言っても、それ自体がハイブリッドな存在であり（異種混濁性）、アイヌや琉球、在日韓国・朝鮮などの要素を排除しては成立しない、という認識が不可欠である。それほど、「文化」の規定は難しい（あるいは不可能な）のであり、しかも「理解」という行為自体が、他者に勝手に介入する知的暴力になりかねない危うさをもっているだけに、「異文化理解」は不可能というニヒリズムに到達しかねないだろう。しかしそうした極限のあり方を心得た上で、自分にとって親しい文化とは別の体系の文化に出会い、対話し、読み解き、その魅力に気づき、違和感を理解に変え、ある時にはその出会いによって変容していく「自己」を再発見する——「比較文化」論はそうした知的冒険の端緒となるような世界の見方、なのである。

そしてそうであるならば、諸民族の闘争が絶えず、情報社会が進化しても二項対立で他者を判断しがちな現代社会の中で、人間や文化のありようが「単一」「固有」ではなく「多様」で「混濁」している本質を指し示す「比較文学」「比較文化」という学問は、若い世代の教養教育の重要な基礎を成す知的営みといえるのではないだろうか。私たち比較研究者たちはその意味で、理論と実践を無理なく結びつける戦略も、今後立てる必要があると実感している。

研究と教育の往還——データと証言

HMCで筆者が主導する助成研究「比較文学比較文化研究の理論と教育の相互作用に関する総合的研究」は、不断に更新する比較研究の最前線を理論化する一方、それが大学や大学院の教育現場といかに関わっているかを、初めて社会調査によって明らかにする試みである。

その成果の最初の報告である本ブックレットでは、2つのセミナーの記録を、読みやすく再構成することとした。

まず第1のセミナーでは——

「忘れられた美術思想家・岩村透への光——比較文学比較文化研究の視座から語る」(今橋映子個人発表)

というテーマで、比較理論が実際の研究にどのように活かされているのかを、きわめて具体的に語ることにしよう。それによって、現在共同著作として構想され

ている『比較文学比較文化ハンドブック』の詳細項目のいくつかが、具体的研究を反映するキー概念であることを、読者には理解して頂けるであろう。

そして第2のセミナーでは――

「人文研究と教育の現場を科学する――「比較文学比較文化」の現場から」

(今橋映子・西田桐子・町田樹・韓程善・井上健の共同発表)

と題して、2021－2022年度に実施した全国シラバス調査と、比較教育担当教員への質的調査の結果（中間）報告を行いながら、

- 1) 全国の大学、大学院における比較関連授業のシラバスを網羅的に採取した結果、どのような傾向がみられたか
- 2) 韓国における比較関連授業のシラバスを採取し、教育体制の特徴と日本の場合とどのような相違がみられたか
- 3) 全国の比較関連授業を担当されている教員に、グーグルフォームを活用した社会調査を実施。その統計分析および自由回答にはどのような意識が反映されたか
- 4) こうした現在の比較関連教育と、1980年代以降の「大学大綱化」の背景とはどのような関連があるのか
- 5) 最終的に、人文科学研究の分野において、教育は研究の鏡か？

といった問題について、今後の議論の出発点になるような具体的統計資料と、観点を提示していきたいと思う。

コロナ禍も三年目に入って、文学芸術の「不要不急」論が声高に論じられることは少なくなったが、しかし同時に、とりわけ人文研究の社会的必要性については、いつでもそれに根拠をもって応えられることが大事であることを、私たちは改めて認識してきた。今回の共同研究は、単に「比較文学比較文化」という学問分野の現象ではなく、人文系学問が、「教育という社会の現場」でいかなる役割を果たしているのか、果たせるのかについて一つの有効な事例を示すことができれば、大変に幸いである。また大学行政の現場においても、私たちが初めて試みた社会調査の結果や方法を、然るべき現状認識や改革のために有効活用して頂ければと考えており、最終結果報告は2024年度中にホームページ上で公開予定（準備中 <http://www.todai-hikaku.org/kaken/index.html>）である。